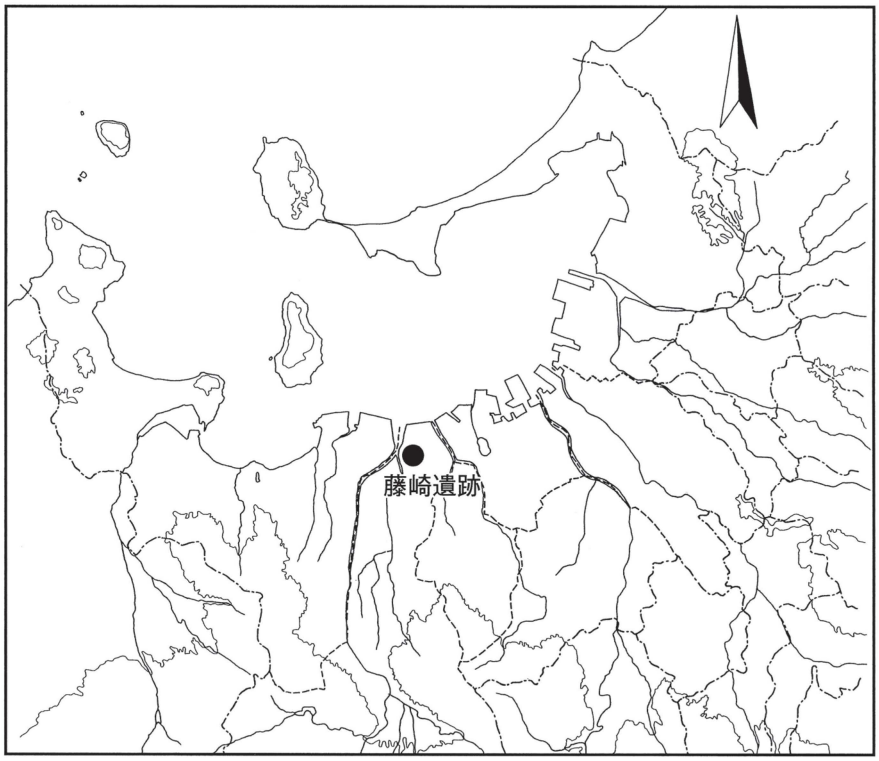
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1303集

藤崎遺跡 20

－第38次調査－



2016

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより玄界灘を介した大陸・朝鮮半島などとの交流の玄関口として発展してきました。地中に埋もれた数々の文化財は、人々が歴史・文化を積み重ね、現在の地域を形作る礎となったことを示す大切な資料です。福岡市教育委員会では開発などでやむを得ず遺跡が破壊される折には発掘調査を実施し、記録として残していけるよう努めております。

本書は、ビル建設に伴う藤崎遺跡第38次調査の報告です。周辺の調査区同様に、約2000年前の弥生時代の墓域の広がりを確認できました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りましたプロスガードシステム株式会社様をはじめとした関係者の方々に心から感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月 25 日

福岡市教育委員会
教育長　酒井　龍彦

例　言

1．本書は早良区藤崎 1 丁目地内のビル建設に伴い、平成 27（2015）年 7 月 14 日から 7 月 31 日に発掘調査した藤崎遺跡第 38 次調査の報告書である。
2．遺構の実測・写真撮影は清金良太・朝岡俊也が行った。
3．遺物の実測は米倉法子・井上加代子・朝岡が行った。
4．遺物の写真撮影は朝岡が行った。
5．製図は朝岡が行った。
6．本書に掲載した方位はすべて磁北である。
7．本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
8．本書に掲載した標高は都市再生街区基準点 1A045（H=4.25m）を基準とした。
9．本書に使用した遺構略号は以下の通り。
　ＳＤ　溝　　ＳＲ　土坑墓　　ＳＴ　甕棺墓
10. 調査中、人骨の取り上げに際し、福岡市埋蔵文化財センターの上角智希氏の協力を得た。
11. 本書に関わる図面・写真・遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
12. 本書の執筆・編集は清金と協議の上、朝岡が行った。ただし、Ⅲ－ 6 、小結「・ST03 出土人骨の所見」のみは上角氏に執筆をお願いした。

遺跡名	藤崎遺跡	調査次数	38次	調査記号	FUA－38
調査番号	1515	分布地図図幅名	室見81	遺跡登録番号	020307
事前審査番号	27－2－27	申請地面積	261.54㎡	調査対象面積	80㎡
調査面積	88㎡（7次調査区内を除く）		調査地	福岡市早良区藤崎1丁目4番、5番1	
調査期間	平成27（2015）年7月14日～7月31日				

本　文　目　次

序
Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
　1．地理的環境 …… 2
　2．歴史的環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 5
　1．調査の概要 …… 5
　2．甕棺墓 …… 5
　3．土坑墓 …… 10
　4．溝 …… 10
　5．その他の遺物 …… 10
　6．小結 …… 10

挿　図　目　次

Fig.1　周辺の遺跡（1/25000） …… 3
Fig.2　調査区の位置（1/500） …… 3
Fig.3　第38次調査区全体図（1/100） …… 4
Fig.4　調査区西壁土層実測図（1/60） …… 4
Fig.5　遺構実測図（1/30・11は1/60） …… 6
Fig.6　甕棺実測図１（1/10・01は1/6） …… 7
Fig.7　甕棺実測図２（1/6） …… 8
Fig.8　SR11及びその他出土の遺物（1/4） …… 9

表　目　次

Tab.1　藤崎遺跡の中世集落動態 …… 12

図　版　目　次

PL. 1　（1）調査区全景（南から）
（2）調査区全景（北から）
（3）調査区北側（南から）

PL. 2　（1）西壁土層北側（南東から）
（2）西壁SD07土層（東から）
（3）西壁土層南側（東から）

PL. 3　（1）ST02（南西から）
（2）ST03（東から）
（3）ST03人骨出土状況（東から）

PL. 4　（1）ST08及びST09（東から）
（2）ST10（北西から）
（3）SR11（北から）

PL. 5　遺物写真 1

PL. 6　遺物写真 2

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市早良区藤崎1丁目４番、５番１におけるビル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成27年（2015年）４月８日付で受理した（事前審査番号27－2－27）。

これを受けて埋蔵文化財審査課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である藤崎遺跡に含まれていること、既存建物解体工事立会において、現地表下100㎝で遺構が確認されていたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、ビル建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成27年７月１日付でプロスガードシステム株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年７月14日から発掘調査を行い、同年10月１日から資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

なお、申請地内南側では昭和58年（1983年）に藤崎遺跡７次調査として発掘調査が行われており、今回の調査中に７次調査区の範囲を確認した上、その範囲外（北側）のみを調査した。

２．調査の組織

調査主体：福岡市教育委員会
調査委託：プロスガードシステム株式会社
調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課　課長　常松幹雄
　　調査第１係長　吉武　学
調査庶務：文化財部埋蔵文化財審査課管理係　川村啓子
事前審査：埋蔵文化財審査課事前審査係文化財主事　大森真衣子
調査担当：埋蔵文化財調査課調査第１係文化財主事　清金良太
　　埋蔵文化財調査課調査第２係文化財主事　朝岡俊也
調査作業：稲富聡　廣瀬公則　馬奈木留雄　山本千加子　吉岡田鶴子　吉田哲夫

※調査・整理報告ともに平成27年度に行った。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．地理的環境

藤崎遺跡は二級河川室見川などの河川の沖積作用により形成された早良平野の室見川河口部東岸にあり、旧海岸線に沿って東西に伸びる標高5～6mの砂丘上とその南側に広がる後背湿地に東西400m、南北650mの範囲で広がる。砂丘は東へ2.5kmの長さがあり、藤崎遺跡の東側500m程の同砂丘上に西新町遺跡が立地する。中世以前、藤崎遺跡の西から南側は潟湖が入り込み、また西新遺跡の南東側の鳥飼から大濠にかけても潟湖（古鳥飼湾）が広がっており、藤崎遺跡東南側の紅葉山（標高30m）、麁原山（標高33m）あたりを付け根として砂丘が博多湾に張り出す様相を呈した。

２．歴史的環境

藤崎遺跡は弥生時代から中世を中心とした遺構が検出される複合遺跡である。

最も古い遺構は5次調査で検出された突帯文期の土器棺墓で、弥生時代には遺跡中央から北側に250基を超える甕棺墓を中心とした大規模な墓域が営まれる。金海式（前期末～中期初頭）までの時期の甕棺墓と土坑墓を合わせた墓群は遺跡の中央から西側の約130mの範囲に営まれ、この時期の早良平野の中でもまとまった墓群のひとつである。さらに中期になると数を増し、東に墓域を広げ200m程の範囲となる。この時期に東に近接する西新町遺跡でも集落の展開とともに甕棺墓群が拡大する。しかし、後期には藤崎遺跡の甕棺は激減し、7次調査の桜馬場式の2基のみ確認される。

弥生終末期に小規模な集落が営まれた後、古墳時代前期になると、弥生時代の甕棺墓群とほぼ同じ範囲から北側にかけて方形周溝墓群が形成され、現在まで16基程が存在するとされる。この方形周溝墓群に伴って5枚の青銅鏡が出土し、岡山県湯迫車塚古墳や山梨県東八代郡中道町下曽根銚子塚古墳などに同笵鏡がある3次調査6号方形周溝墓の三角縁二神二車馬鏡や、32次調査1号周溝墓の三角縁盤龍鏡のほか、3次調査で珠文鏡、4次調査で変形文鏡、27次調査地点で方格渦文鏡が出土した。

その後、古墳時代後期から古代の住居跡があるが、わずかである。藤崎遺跡が集落として盛行するのは12世紀後半から13世紀前半で、方形区画状の溝が多数みられる。ただし、元寇前後の13世紀中頃～後半にかけて集落が急速に衰退し、以後、中世末まで遺構はみられない（Ⅲ－６、小結）。なお、『蒙古襲来絵詞』に描かれた元軍の陣は、1274年の文永の役の際に遺跡の南東に近接する麁原山に敷かれたものである。遺跡の約200m北には1276年築造の元寇防塁が東西方向に通る。

近世には福岡藩第4代藩主黒田綱政らの発願で元禄11年（1698年）に黄檗宗禅寺である千眼寺が藤崎遺跡の範囲内に建立され、現在まで続いている。また享保元年（1726年）に早良郡麁原村西新町上之山（西新町遺跡範囲内）に御焼物所が仕立てられ、一端途絶えていた福岡藩による高取焼の窯業が再開した後、寛保元年（1741年）に紅葉山北麓に新たな窯が開かれ、藤崎遺跡35次調査では雛壇状の整地層から近世から近代の高取焼の膨大な焼損品や窯道具が出土した。なお、福岡藩・黒田家の守護神として信仰された紅葉八幡宮の西新から紅葉山への遷宮は大正二年で、それ以前から紅葉山に鎮座した宇賀神社、稲荷神社も近世を遡らない。なお、遺跡内に鎮座するその他の神社として猿田彦神社があり、境内に2基の庚申塔がある。

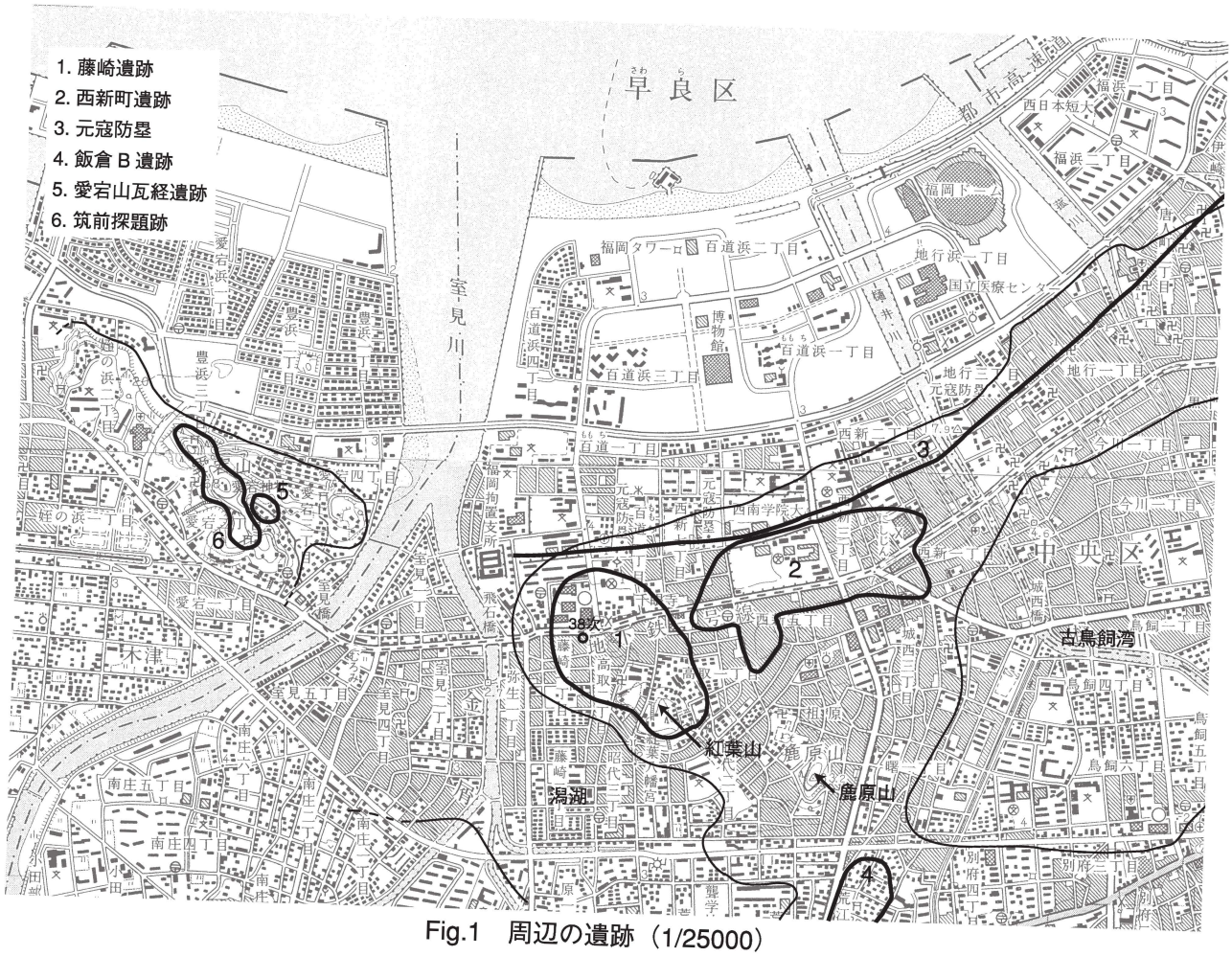


Fig.1　周辺の遺跡（1/25000）

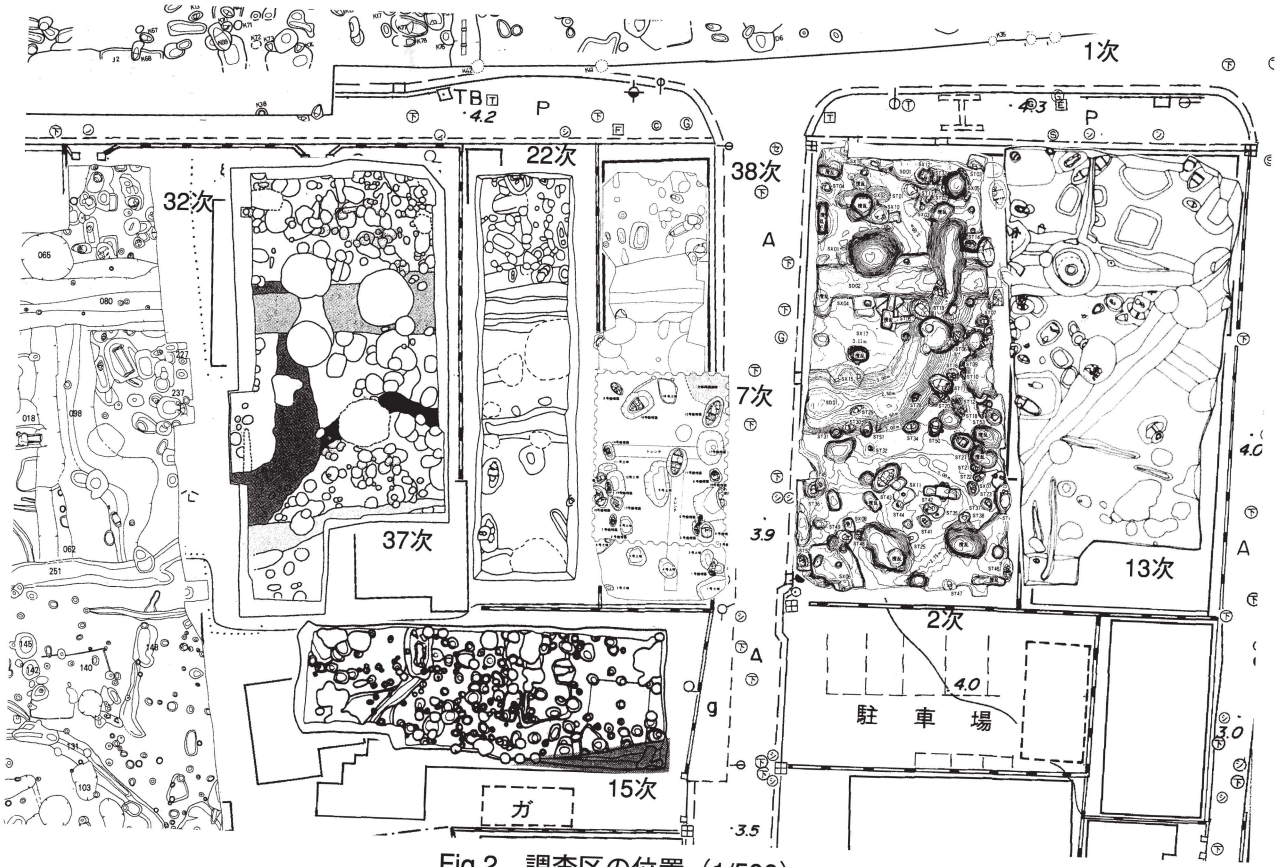


Fig.2　調査区の位置（1/500）

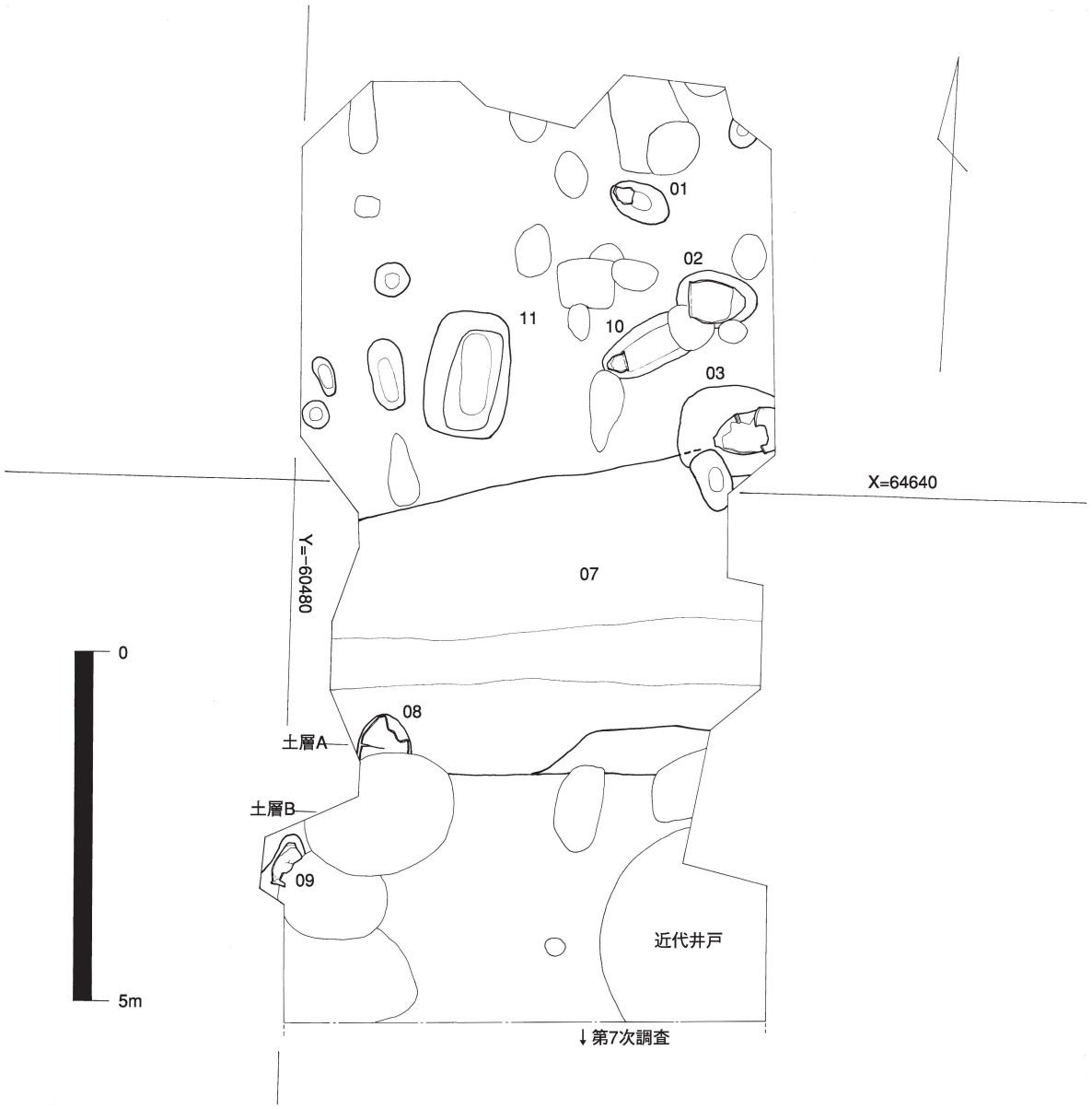
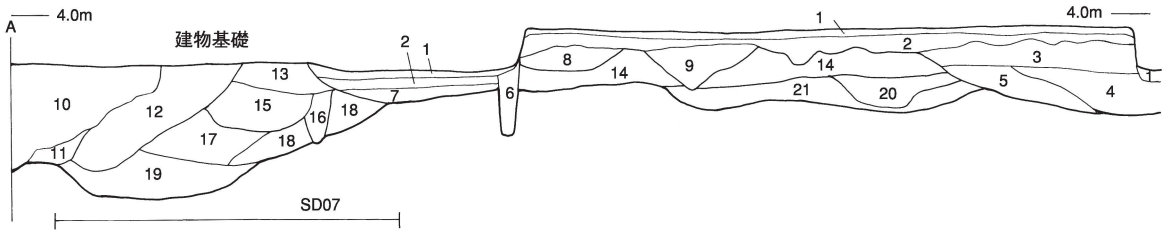


Fig.3　第38次調査区全体図（1/100）



1、バラス
2、茶褐色砂　焼土・炭混
3、黒色砂
4、暗灰色砂
5、灰色砂
6、灰色砂
7、黒褐色砂
8、黒褐色砂
9、暗茶褐色砂
10、黒色砂　ガラ混
11、黒褐色砂
12、暗褐色砂
13、暗灰色砂
14、暗灰色砂　近世包含層
15、暗茶褐色砂　近世土坑？
16、黄茶褐色砂　近世柱穴？
17、暗灰色砂　SD07埋土
18、暗褐色砂　SD07埋土
19、灰色砂　SD07初期埋土
20、灰色砂
21、灰白色砂
22、暗青灰色砂　ガラ混
23、黒色砂　焼土・炭混
24、黒色砂
25、茶褐色砂
26、暗茶褐色砂
27、黄色砂　地山に近い　ST09埋土
地山・・・黄灰色砂

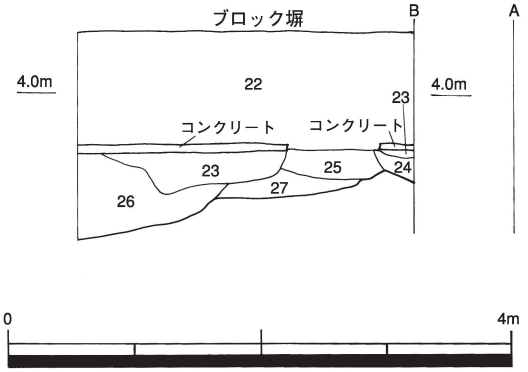


Fig.4　調査区西壁土層実測図（1/60）

Ⅲ．調査の記録

１．調査の概要

第38次調査区は藤崎遺跡の範囲の中心付近に位置し、遺跡北側を東西に伸びる古砂丘南側斜面にあたる。調査面積は約88㎡である。地表下100～120cmで基盤の黄白色砂層に達し、これを遺構面とした。遺構面の標高は3.0～3.2ｍのほぼ平坦で、北がやや高い。図化した西壁土層では、近世遺物の包含層である14層下が平坦に近く、ある時期での地表面であった可能性がある。なお、37次調査で指摘された弥生時代の旧表土層は確認できなかった。上層からの掘りこみには、埋土に焼土を含み近世と考えられるものもあったが、時間的制約などから近世以降の掘り込みは攪乱とみなし、調査を進めた。

本調査区では弥生時代の計６基の甕棺墓を検出し、周辺の調査区同様に弥生時代の墓域の広がりを確認できた。また、二段掘りの土坑墓を１基検出し、甕棺と同じ時期と考えられる。その他、東西に隣接する２次・22次調査区で検出された中世の溝の続きを検出し、近世包含層からは高取焼関連の窯道具が出土した。

２．甕棺墓

ST01（Fig.５・６　PL.１・５）

小児棺。上甕の痕跡はなく、単棺か。遺構面からの掘り込みが浅く、上半が削り取られる。掘方埋土は地山よりもやや灰色がかった砂で、遺構掘方は不明確だが90×54cm・深さ15cm程。埋置角度は水平に近く、やや口縁部側が上がる。主軸は磁北より114°東に振る。

甕は口縁部を欠く底部から肩部までの残存で、胴部も約２分の１を欠く。反転復元での胴部最大径が26.8㎝、残存部分で器高が30.0㎝、底径が8.8㎝。底の形態は回転台の痕跡（？）でわずかに上げ底となる。突帯はない。外面調整は全体が縦方向のハケ目がはっきり残り、内面調整はナデ仕上げだが底部付近以外は明確にナデ痕が残らない。色調は外面が黄橙（10YR）、内面がにぶい黄橙（10YR）。内外にススコゲは認められないが、内面は底部近くになるにつれ焼成が高温に至っておらず、黒い。外面にはまだらに黒い部分があり、黒漆が塗られていた可能性がある。胎土は白色砂粒のほか、白雲母片を多く含む。底部形態から、須玖Ⅰ式相当で、時期は弥生時代中期前半～中頃か。

ST02（Fig.５・６　PL.３・５）

成人棺。上甕の痕跡はなく、単棺か。一部を攪乱に切られ、胴部から口縁部の３分の２を欠く。掘方埋土は地山の黄白色砂よりやや橙色がかった砂で、地山とほぼ見分けがつかず、掘方は不明確であった。埋置角度は約10°で、主軸は磁北より92°西に振る。甕内部より骨の細片が出土した。

甕は鋤先形口縁の端部にハケ目工具で刻み目をつけ、口径が反転復元で53.0㎝、底径10.1㎝、器高74.5㎝。底部はわずかに上げ底だが、他の甕棺に比べ回転台の痕跡は明確でない。底部外周に粘土の継ぎ目が確認できる。突帯はない。外面調整は口縁部以外は縦方向のハケ目で、胴最大径より上部はハケ目工具の年輪幅が広い。内面調整はナデ仕上げで、底部付近以外は明確なナデ痕が残らない。色調はにぶい黄橙（10YR）～橙（５YR）。胴部外面全体にまだらな黒色部分があり、また外面下部には所々に垂れたような赤い付着物があるため、顔料が塗布された可能性がある。内面下部にも点々と黒い付着物がある。胎土は白色砂粒のほか、白雲母片を多く含む。城ノ越式相当で、時期は弥生時代中期初頭。

ST03（Fig.５・６　PL.３・５）

上甕がしっかりと覆い被さる覆口式の合口成人棺。掘り込みは深く、遺構面より攪乱を掘り下げた

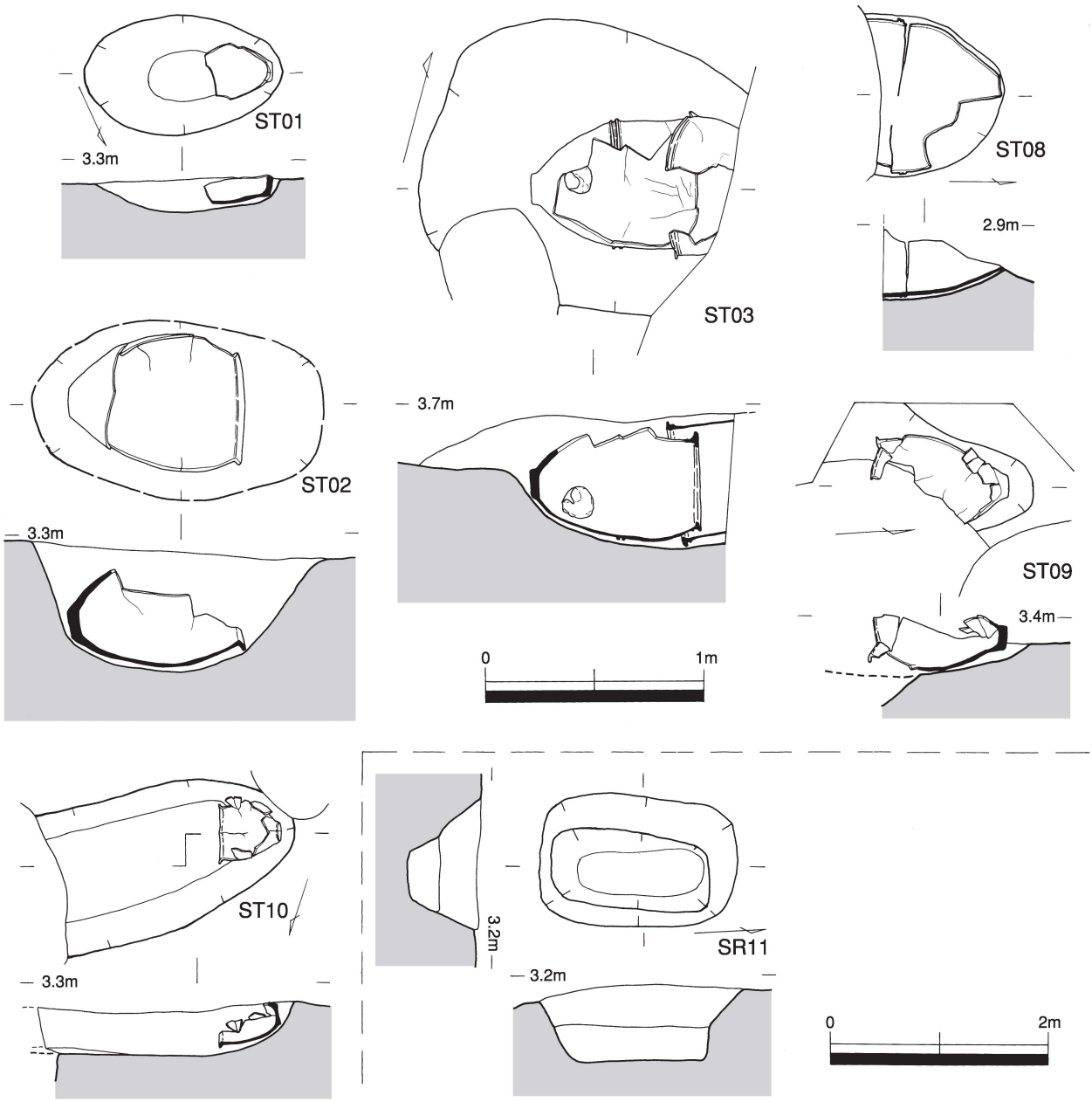


Fig.5　遺構実測図（1/30・11は1/60）

時に検出し、ほぼ完形に復元できた。遺構掘方はやや不明確だが、130×140cm程で長辺は調査区外へ続き、深さ60cm程。埋置角度は水平に近く、やや口縁部側が上がる。主軸は磁北より74°東に振る。下甕より頭蓋骨が出土したが、他の部位の人骨の出土はない。

上甕はほぼ完形である。やや起き上がった鋤先形口縁で、口径62.7㎝、底径10.7㎝、器高53.0㎝。底はほぼ平らで、突帯は口縁直下に三角突帯１条を貼り付ける。外面調整は全体的に縦方向のハケ目を残し、内面もナデ消してはいるが、全体的にうっすらと縦方向のハケ目が見える。また外面には径7㎝前後のタタキ面と左上がりのタタキ痕跡が確認できる。色調は明黄褐（10YR）。大きな黒斑は外面胴部中程に１箇所、径30㎝程の範囲にある。内面の全体と外面の約２分の１がまだらに黒く、顔料が塗られた可能性がある。胎土は白色砂粒のほか、白雲母片を多く含む。

下甕は胴部の約５分の１が欠損する。T字形に近い鋤先形口縁で、口径52.8㎝、底径15.0㎝、器高77.3㎝。底はほぼ平らで、外側がわずかに上がる。突帯は口縁下に三角突帯１条と、胴下部にしっかりとしたコの字突帯２条を貼り付ける。調整は全体的に丁寧にナデており、痕跡は少ないが、内面胴

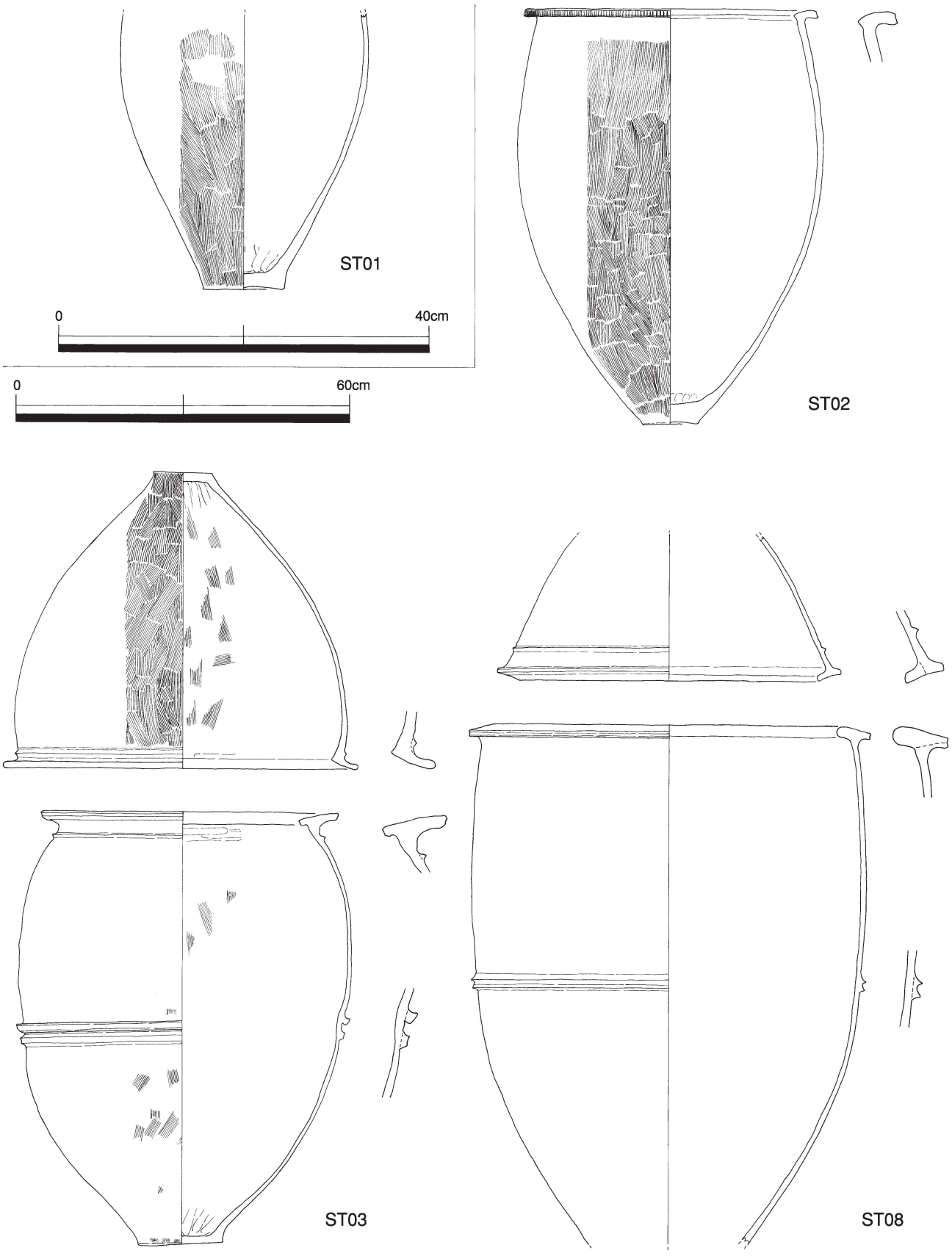


Fig.6　甕棺実測図１（1/10・01は1/6）

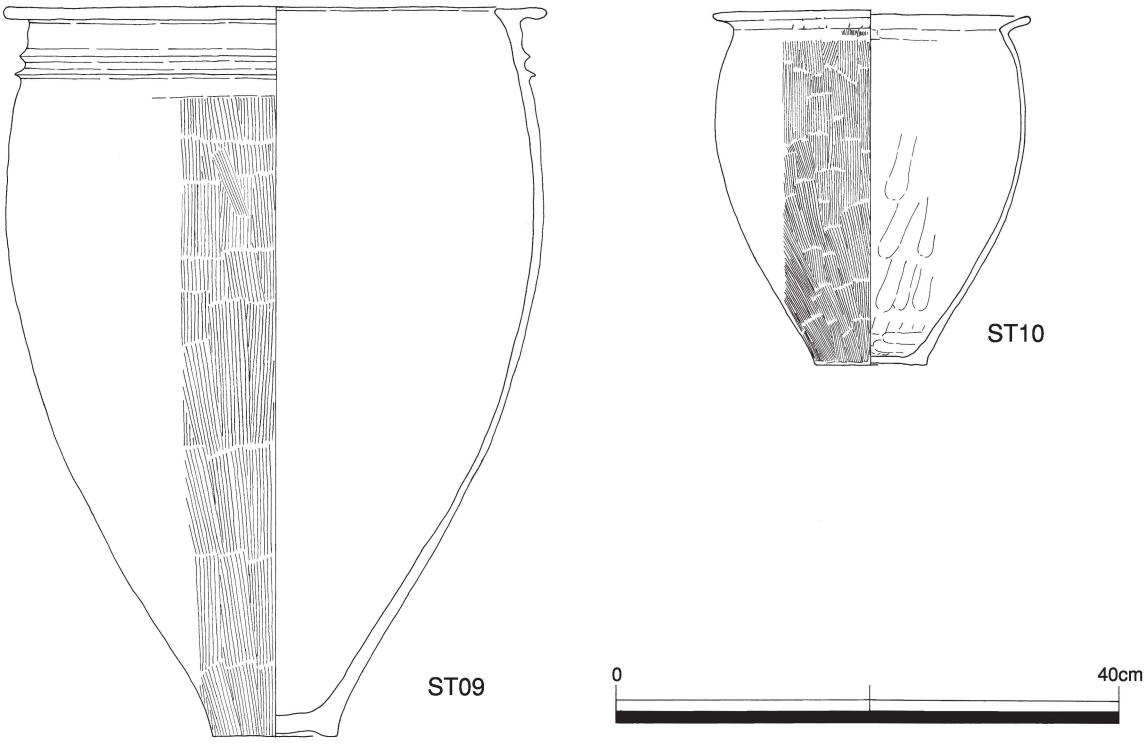


Fig.7　甕棺実測図２（1/6）

上部および外面胴下部にうっすらと年輪幅が狭い丁寧な縦方向のハケ目が残り、その上から所々に年輪幅が広い雑なハケ目が残る。色調は浅黄橙（10YR）。所々に赤い液体が飛び散ったような付着物があり、外面底部付近で特に顕著であり、また全体的にまだらに黒く、顔料が塗布された可能性がある。内面胴上部に径25cm程で特に黒い部分があり、その部分の外面胴部が縦長に広く特に黒く、溜まり黒斑とそれに対応する置き黒斑だろうから、水平に近い横向きでの焼成が想定できる。胎土は白色砂粒のほか、白雲母片を多く含む。立岩式相当で、時期は弥生時代中期後半。

ST08（Fig.５・６　PL.４・５）

合口成人棺で、おそらく接口式である。上甕はコンクリートの埋設物に大部分を壊されて辛うじて口縁部の一部が残り、下甕もSD07により半分以上を削られる。遺構掘方は不明確だが55×74cmで、長辺は円形埋設物下に続き、深さは20cm程。埋置角度は上甕が口縁部側の一部のみ残存したことから、少し口縁部側が上がると考えられるが、15°以下であろう。主軸は磁北より約180°振る。

上甕は口縁部の８分の１程が辛うじて残る。Ｔ字形口縁で、口径は反転復元で53.2cm。残存部分での器高が26.0cm。突帯は１条の三角突帯を貼り付ける。調整は全体を丁寧にナデ、痕跡は明確でない。色調は橙（7.5YR）。外面の一部が縦に帯状にぼんやり黒く、黒斑か。外面には他に点々と黒い付着物があり、顔料が塗布された可能性がある。胎土は白色砂粒の他、白雲母片を多く含み、また赤色粒や角閃石？（細長で黒く光る鉱物）を含む。

下甕は中世の溝007が底部を完全に削平し、口縁部から胴部も約２分の１を欠損する。Ｔ字形口縁で、口径が反転復元で72.6cm、残存の器高が93.2cm。突帯は２条の三角突帯を一緒に貼り付ける。調整は全体を丁寧にナデ、痕跡は明確でないが、外面下部の所々にタテハケの終点のみ残る。色調は外面がにぶい黄橙（10YR）で一部橙（５YR）、内面が橙（7.5YR）。外面全体がまだらに黒く、ススもしくは顔料だろう。胴上部の外面には径10cm程の黒斑が２か所あり、焼成時の棒状具による２点支持が想定できる。内面の突帯あたりの高さに径12cm程の黒斑があり、外面の２か所の黒斑のちょうど真ん中あたりになるので、溜まり黒斑だろう。胎土は白色砂粒の他、赤色粒や多くの白雲母片を含むが、上甕のような角閃石は認められない。須玖式相当で、時期は弥生時代中期中頃。

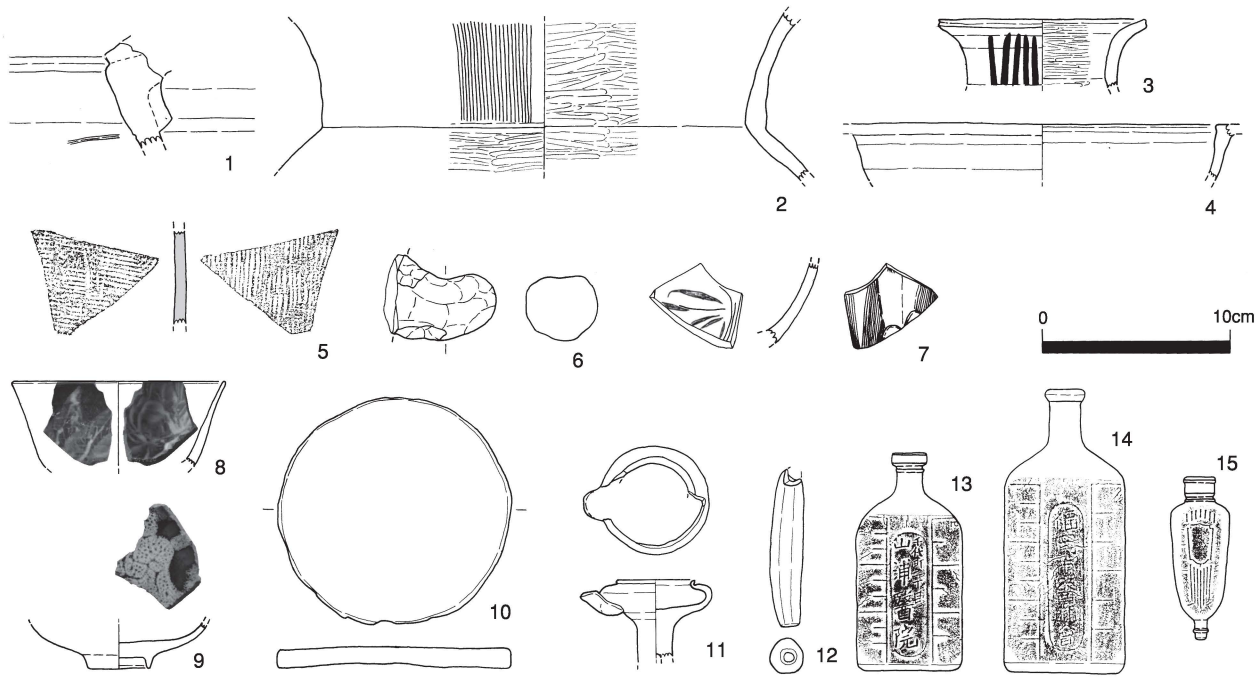


Fig.8　SR11及びその他出土の遺物（1/4）

ST09（Fig.5・7　PL.4・6）

小児棺。上甕の痕跡はなく、単棺か。南東側を攪乱により壊される。掘方埋土は地山の黄白色砂よりやや橙色がかった砂で、掘方は96×40cm以上・深さ15cm程。埋置角度は水平に近く、やや口縁部側が上がる。主軸は磁北より176°西に振る。

甕は胴部から口縁部の約3分の2を欠く。鋤先形口縁で、口径は反転復元で43.2㎝、底径10.0㎝、器高57.7㎝。回転台の痕跡で、やや上げ底になる。突帯は2条の三角突帯を貼り付ける。外面調整は口縁部を除いて縦方向のハケ目で、突帯付近は貼り付け時にナデ消す。底部付近はハケ目工具の年輪幅が広い。内面調整は丁寧なナデ仕上げで、明確な痕が残らない。色調は浅黄橙。外面は全体的にススが付着するが、底部付近は被熱によりススが飛んでいる。底部の地面に接する部分も黒い。内面は全体的にコゲが付く。ススコゲの付着のため、黒色顔料や黒斑の有無は不明確。胎土は白色砂粒のほか、白雲母片を多く含む。汲田式段階相当で、時期は弥生時代中期前半。

ST10（Fig.5・7　PL.4・6）

小児棺。上甕の痕跡はなく、単棺か。遺構面からの掘り下げ時に、上部がひしゃげた状態で検出され、ほぼ完形に復元できた。掘方埋土はやや灰色がかった砂で、掘方は110×65cm以上・深さ20cmだが、甕棺に対して掘方が大きく、別遺構との切りあいを認識できなかった可能性がある。埋置角度は水平に近く、やや底部側が上がる。甕棺の主軸は磁北より75°東に振る。甕棺ではなく、ST03に伴う祭祀の痕跡の可能性もあろうか。

甕はくの字に近い鋤先形口縁で、口径25.2㎝、底径9.0㎝、器高28.2㎝。回転台の痕跡でわずかに上げ底になり、底部の地面と接する部分は粘土の継ぎ目が残る雑なつくりである。突帯はない。外面調整は口縁部を除いて縦方向のハケ目が残り、口縁下部にもハケ目工具が当たった跡がある。内面調整は基本的に縦方向のナデで、底部に近づくほど強く残り、一部横方向のナデも残る。色調は浅黄橙～橙（7.5YR）。ススコゲの付着は認められない。胴下部外面の一部に幅8㎝程の縦長に置き黒斑があるが、反対側の胴上部に対応する覆い黒斑はない。胴部外面にはまだらに、胴上部内面には点々と黒い付着物があり、顔料が塗布された可能性がある。胎土は白色砂粒のほか、白雲母片を多く含む。須玖Ⅱ式新段階～高三潴式古段階相当で、時期は弥生時代中期末～後期初頭。

3．土坑墓

SR11（Fig. 5　PL. 4）

2段掘りの土坑墓か。全景撮影後の遺構精査で検出した。埋土はやや灰色がかった砂で、掘方は182×118cm・深さ68cm程。段落ち下の掘方は144×70cm・深さ30cm程だが、遺構上部よりも埋土と地山の境が不明確で、やや掘りすぎた可能性もある。主軸は磁北より4°東に振り、甕棺の中ではST08・09に近い。上層より遺物が出土したが、遺構に伴うかは不明。

出土遺物（Fig. 8）

1は甕棺口縁部片。1条の三角突帯を貼り付ける。立岩式古段階相当で、時期は弥生時代中期後半。

4．溝

SD07（Fig. 4　PL. 2）

隣接する調査区でも検出された中世の溝で、幅は3.5～4.5m・深さ0.8m程。埋土は下層の灰色砂（19層）と上層の暗褐色・暗灰色砂（17・18層）が明確に分かれ、少なくとも1度は掘り直しがある。

5．その他の遺物（Fig. 8　PL. 6）

試掘時や遺構検出時の遺物、また攪乱出土の遺物である。

2・3は壺。2は頸部。外面全体と内面上部に丹塗りをして横方向に磨く。外面の頸部より上に幅3.7cmの範囲で限定的にタテ方向のハケ目を施す。須玖Ⅰ式新段階～須玖Ⅱ式古段階（弥生時代中期中頃～後半）。3は口縁部。全体的に横方向のミガキを施し、外面には縦方向に暗文を施す。弥生時代中期初頭。4は高坏の坏部だろう。外面上部から内面に丹塗りの痕がある。弥生時代中期。5は須恵器の甕片。内面に平行当て具痕が残り、9～10世紀のものか。6は土師器の把手。どっしりとした印象で7世紀以降のものか。7は龍泉窯系青磁碗。大宰府分類でⅠ－6ｂ類にあたり、12世紀後半～13世紀前半頃でSD07に関わるものか。8・9は陶器の小碗で、9は高取焼。10は窯道具のハマ。11は燭台。12は土錘。13はガラス製の薬瓶で「千代町二丁目山浦醫院」とあり、内容量は100ml。14もガラス製の薬瓶で、「福岡市醫師会」とあり、内容量は200ml。福岡市医師会は明治40年（1907年）に発足し、現在も続いている。未報告分を含め、「山浦醫院」の薬瓶は100mlのものを二つ、「福岡市醫師会」の薬瓶は60mlのものを三つと200mlのものを二つ採集した。調査区には元々病院が存在し、薬の流通の違いを表すのだろうか。15は目薬瓶。本来は上部にスポイドがつく。市村慎太郎氏の編年を参考に、時期は1940年頃～1950年代（市村2010）。

6．小結

・甕棺墓群について

本調査区では6基の甕棺墓と1基の土坑墓を検出し、周辺調査区同様に弥生時代の墓域の広がりを確認できた。それぞれの時期は以下のように考える。

ST01（小児棺）	・・・	中期前半～中頃	ST09（小児棺）	・・・	中期前半
ST02（成人棺）	・・・	中期初頭	ST10（小児棺）	・・・	中期末
ST03（成人棺）	・・・	中期後半	SR11（土坑墓）	・・・	中期中頃？
ST08（成人棺）	・・・	中期中頃			

SR11の時期はST08のような須玖式成人棺が南接する7次調査、西接する22次調査でもおおよそ南北方向をとるため、須玖式併行期の可能性が高いと考えた。本調査区では甕棺の時期にばらつきがある

ため、群構造などは不明な点が多い。しかし、藤崎遺跡ではこれまで250基を超えるまとまった数の甕棺が検出されており、いずれ整理・検討せねばなるまい。

・ST03出土人骨の所見

人骨は頭蓋骨のみが遺存する。体部の骨はまったく残っていない。頭蓋骨は，合わせ口甕棺の下甕の底部付近で検出されているが，頭蓋底が甕棺底部側，頭頂が甕棺中央側，顔面が北北西を向いている。通常の埋葬姿勢では起こりえない向きである。埋葬後に首の筋繊維の腐敗によって二次的に大きく動いたものか。

頭蓋骨は頭頂骨，後頭骨，両側の側頭骨，つまり顔面を除く部位を確認でき，顔面および下顎骨・歯牙は遺存していない。乳様突起が小さく，外後頭隆起が発達していないことから女性と推定される。頭蓋骨の縫合の閉鎖がかなり進んでいる。歯牙がないため根拠がやや弱いが，年齢は熟年（40～59歳）以上と推測される。

・２次調査検出の方形周溝墓について

本調査区の東に近接する２次調査区ではＬ字状に屈曲する溝が検出され、甕棺に切られることから九州最古の方形周溝墓ともされる（市報496集）。本調査区に南接する７次調査でも北東隅でわずかに北へ屈曲する溝の続きが検出されたとされ、本調査区でもその続きの南北方向溝が検出されると期待された（Fig.2）。しかし、本調査区南端で７次調査区の北端を示す矢板跡を検出できたが、溝の続きは検出されず、方形周溝墓の溝の続きは調査区の東側を巡ると考えられる。ただ、本調査では7次調査区で周溝の端とされたすぐ北側に深さ1.1ｍの近代の井戸を検出し、7次調査ではこの井戸の掘方の続きを方形周溝墓の溝と誤認した可能性もある。また37次調査では黒色土を埋土として屈曲する弥生時代中期の溝が検出され、甕棺に切られるが、方形周溝墓でない（福岡市報1240集）ため、2次調査検出の溝が方形周溝墓でない可能性も考えておかねばならない。さらに藤崎遺跡で検出されるその他の方形周溝墓の時期は古墳時代前期であるため、時期も慎重な検討が必要である。藤崎遺跡の基盤砂層は博多遺跡群などの砂層に比べはるかに締まりがなく、切りあい関係の認識が困難であるので、甕棺との切りあいだけで時期を確定するのは危険である。

・中世の溝SD07について

SD07は西から32次・37次・22次調査から連続し、本調査区を通って2次・13次・30次調査へ唐津街道に沿って東西方向にほぼ直線的に110m程続く。問題はその東側で、10次・8次・11次・12次・14次調査と2条の溝が交差しながら70m程続き、このうちどちらと接続するかが不明確である。交差する溝の一方（仮に溝Aとする）は直線的で、時期は8次調査の報告で「（大宰府分類の）白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２類、同案窯系青磁皿Ⅰ－２類が認められる一方、口禿の白磁Ⅳ類、龍泉窯系青磁Ⅲ類が認められないことと、土師器皿、及び坏の形態・法量からみて、少なくとも13世紀中葉以降の所産かと推測される（市報138集）。」とあるが、これは文脈から「中葉以前」の誤りである。10次調査の報告での指摘（市報138集）のように12世紀末頃を掘削時期とするのが妥当で、少なくとも13世紀初頭までは存続する可能性が高い。蛇行しながら溝Aに交差する溝（溝Bとする）は、溝Aより後出し、掘削時期は13世紀前半～中頃のどこかで、埋没時期もその範囲のどこかであるため、10次調査の報告では元寇防塁の二次的防御線の可能性も示唆される。溝Aを直線で伸ばすとややズレが生じるものの、SD07から連続する溝は直線的な様相や、出土する土器の共通性（特に青磁類）を重視

し、溝Aに接続すると考えたい。

表に中世の藤崎遺跡をまとめた。藤崎遺跡の中世集落の形成開始は11世紀後半～12世紀前半に遡る可能性はあるが、12世紀後半に突如遺物量が増加し、井戸や建物など明確な生活遺構も現れる。9次・34次・29次調査区あたりがその中心となり、製鉄鍛冶関連遺物が出土するとともに、遺跡の南側一帯に方形区画状の溝が多数みられる。12世紀末頃には集落がさらに拡大し、遺跡中央付近に前述の溝Aが掘削され、13世紀前半まで集落が盛行する。ただし溝Aより北側に生活遺構は見当たらず、遺構は土坑墓のみである。その後、13世紀中頃に集落は急速に衰退する。元寇に際して集落の移動があったのだろうか。

市村慎太郎2010「近現代ガラス製目薬瓶の型式学的研究」『大阪文化財研究第37号』

楠瀬慶太2007「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相―博多遺跡群の土師器編年―」『九州考古学82』

橋口達也2005『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣

福岡市博物館1998『弥生時代のタイムカプセル』平成10年度福岡市博物館特別企画展

山本信夫1990「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」『九州上代文化論集』

Tab.1　藤崎遺跡の中世集落動態

次数	位置	報告	前Ⅰ期	前Ⅱ期	前Ⅲ期	後Ⅰ期	後Ⅱ期	後Ⅲ期	遺構・遺物
19 次	東	260	?	?	?	?	?	?	自然流路か
26 次	東	年報 9							
25 次	北	419	―	―	―	―	―	―	
33 次	北	年報 17							
4 次（第 7 地点）	北	80	―	―	―	―	―	―	
6 次	北								
3 次（第 6 地点）	北	80	―	○	△	―	―	―	土坑墓（青磁・鉄刀を副葬）
1 次（第 4 地点）	北	62	―	○	―	―	―	―	遺物のみ
14 次	中央	232	―	○	―	―	―	―	溝
12 次	中央	232	―	○	―	―	―	―	溝
11 次	中央	138	―	○	―	―	―	―	溝
8 次	中央	138	―	○	?	―	―	―	井戸（溝にやや先行？）・溝
10 次	中央	138	―	○	△	―	―	―	溝
30 次	中央	606	―	○	―	―	―	―	溝
13 次	中央	232	?	○	△	―	―	―	井戸（前Ⅰ期？）・溝・方形区画溝？
2 次（第 5 地点）	中央	496	?	○	?	―	―	―	溝・土坑墓？
38 次	中央	1303	―	○	―	―	―	―	溝
7 次	中央	137	―	―	―	―	―	―	
22 次	中央	376	?	○	―	―	―	―	溝・石鍋
37 次	中央	1240	―	○	?	―	―	―	溝・土坑、水注
32 次	中央	824	―	○	―	―	△	―	溝・土坑（前Ⅱ期）、防長系すり鉢（後Ⅱ期）
5 次（第 8 地点）	西	80	―	―	―	―	―	―	
27 次	西	573	―	―	―	―	―	―	
20 次	南	338	△	○	―	―	―	―	白磁（前Ⅰ期）、井戸・溝（前Ⅱ期）
15 次	南	259	?	○	?	?	―	―	土坑・方形区画溝
18 次	南	259	―	○	―	―	―	―	溝（方形区画か）・柵（逆茂木？）・土坑
21 次	南	338	?	○	△	―	―	―	溝（前Ⅱ～Ⅲまで継続？）・東播系須恵器？
16 次	南	259	―	○	―	―	―	―	溝
9 次	南	137	?	◎	?	△	―	―	方形区画溝、羽口・鉄滓・天目・水注
34 次	南	903	―	◎	○	―	―	―	建物・溝・井戸（やや後出？）、羽口
29 次	南	607	?	○	?	―	―	―	井戸・溝・土坑、鉄滓・石鍋
36 次	南	1052	?	○	―	―	―	―	溝・土坑
24 次	南	年報 8		○?					井戸・溝・土坑
31 次	南	年報 16	―	―	―	―	―	―	
17 次	南	259	?	○	?	△	?	―	井戸・土坑
28 次	南	607	?	○	○	―	―	―	井戸・方形区画溝（前Ⅱ～Ⅲまで継続？）、水注
23 次	南	376	―	○	―	―	―	―	溝・木棺墓？
35 次	南	916	―	―	―	―	―	―	

◎・・・遺構か遺物が密にあり　○・・・遺構か遺物があり
△・・・遺物のみわずかにあり　？・・・遺物の時期が不明確で、若干ある可能性あり　※全て報告書による
前Ⅰ期＝11 世紀後半～ 12 世紀前半　前Ⅱ期＝12 世紀後半～ 13 世紀前半　前Ⅲ期＝13 世紀後半～ 14 世紀前半
後Ⅰ期＝14 世紀後半～ 15 世紀前半　後Ⅱ期＝15 世紀後半～ 16 世紀前半　後Ⅲ期＝16 世紀後半

（１）調査区全景（南から）

（２）調査区全景（北から）

（３）調査区北側（南から）

PL. 2

（１）西壁土層北側（南東から）

（２）西壁 SD07 土層（東から）

（３）西壁土層南側（東から）

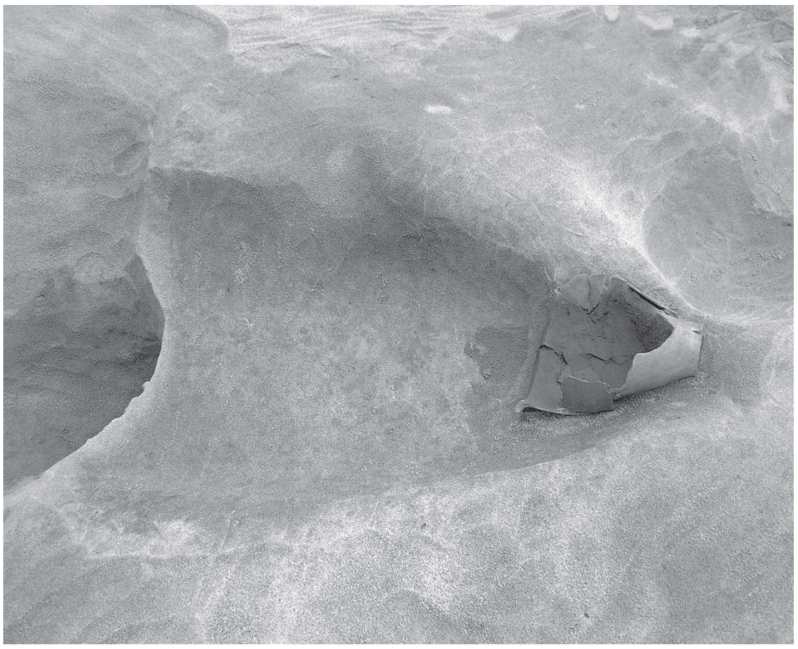
（1）ST02（南西から）

（2）ST03（東から）

（3）ST03 人骨出土状況
（東から）

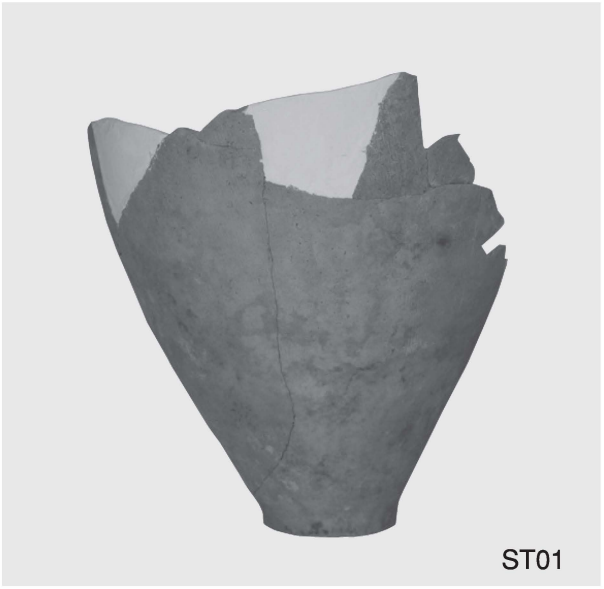
PL. 4

（１）ST08 及び ST09（東から）



（２）ST10（北西から）

（３）SR11（北から）


ST01

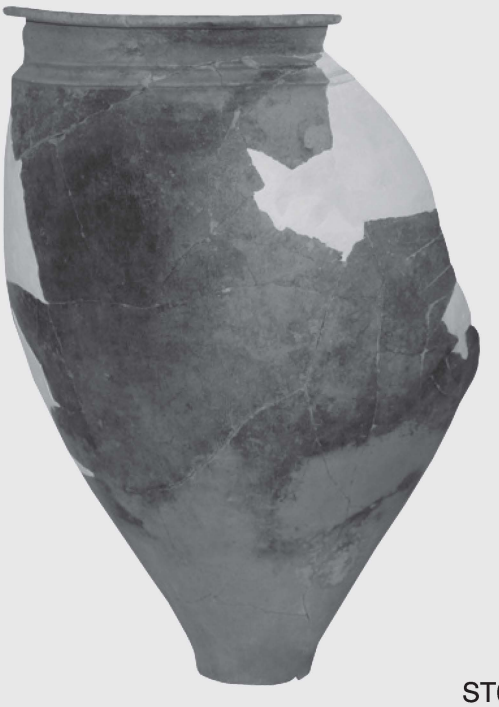
ST02

ST03

ST08

遺物写真 1

PL. 6



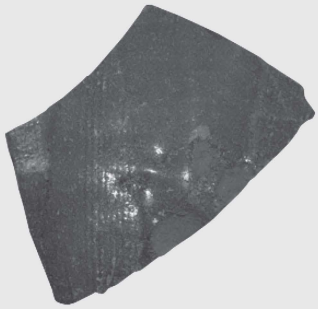
ST09

ST10

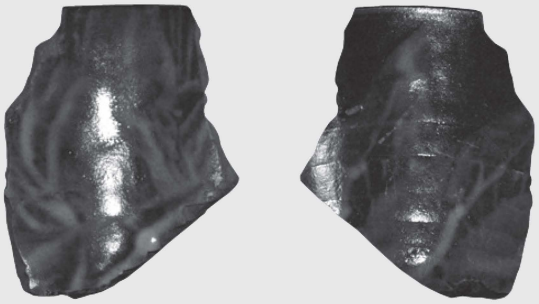
2

3

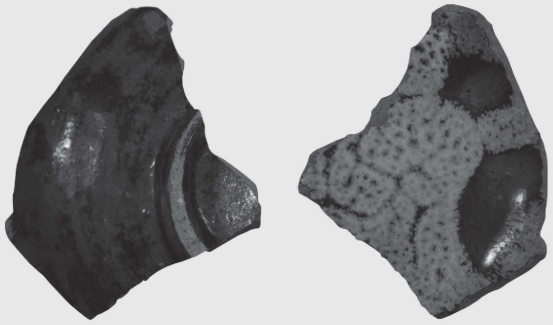
6



7



8



9

15 14 13

遺物写真 2

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふじさきいせき
書　　名	藤崎遺跡　２０
副 書 名	―第３８次調査―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１３０３集
編著者名	朝岡俊也
編集機関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒８１０－８６２０　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	２０１６年３月２５日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ふじさきいせき 藤崎遺跡	ふくおかけん 福岡県 ふくおかしさわらく 福岡市早良区 ふじさき 藤崎 いっちょうめ １丁目 ちない 地内	40137	0307	33° 34′ 52″	130° 20′ 55″	20150714～ 20150731	88 ㎡	ビル 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふじさきいせき 藤崎遺跡	墓地	弥生・中世・近世	甕棺墓・ 土坑墓・溝	弥生土器・陶磁器・ 窯道具	甕棺の１基より、 頭蓋骨が出土

要　約

藤崎遺跡は室見川などが形成した早良平野の下流部で、旧海岸沿いに東西方向に形成された古砂丘上およびその後背湿地に位置する。第３８次調査は遺跡中央部の古砂丘の南側斜面に位置し、地表下１００～１２０ｃｍで基盤の黄白色砂層に達する。

弥生時代の遺構は中期の甕棺墓群（成人棺３基・小児棺３基の計６基）を検出し、周辺の調査区同様に墓域の広がりを確認できた。また、時期が不明確だが、二段掘りの土坑墓も検出し、甕棺と同じ時期と考えられる。甕棺の１基からは女性の頭蓋骨が出土したが、その他副葬品などの出土は無い。東側の２次調査では北部九州最古の方形周溝墓ともされるL字状の溝があるが、当調査区で期待されたその続きの検出はなく、両調査区間の道路下で屈曲するのだろうか。

中世の遺構は東西に隣接する２次・２２次調査区で検出された12～13世紀の溝の続きを検出した。なお、近世包含層より、高取焼関連の窯道具が出土した。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1303集

藤崎遺跡　２０

－第38次調査報告－

2016年（平成28年）3月25日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　巧文社印刷株式会社
福岡市博多区古門戸町9番16号

藤崎遺跡20

―第38次調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一三〇三集

二〇一六

福岡市教育委員会